

特別講演 2

「不眠症の新たな治療戦略

～オレキシン受容体拮抗薬を実臨床でどう活かしていくか～」

高知鏡川病院 睡眠医療センター所長

川田 誠一 先生

現在、臨床現場にて用いられている代表的な睡眠障害の分類基準として、睡眠障害国際分類（ICSD）があるが 2014 年に第 3 版（ICSD-3）が発刊された。第 3 版での不眠症における主な変更点としては、不眠障害を 3 つのカテゴリーに分類する、また今までの原発性・2 次性で不眠症を分類するという考え方を改め、種々の疾患に併存する不眠症として診断するようになった点などである。これにより、睡眠障害の診断に大きな方向転換が生まれてくるものと思われる。

一方、治療においても新たな変化が見られている。従来の不眠症治療において汎用されている GABA 系薬剤とは異なる作用機序をもつオレキシン受容体拮抗薬（スボレキサント）が世界に先駆け本邦にて 2014 年に上市された。このオレキシン受容体拮抗薬は、脳内で覚醒を維持する神経ペプチドであるオレキシンの働きを弱めることにより、睡眠を促す新規作用機序の不眠症治療薬であり、この薬剤の登場により、我々は不眠症治療における新たな治療選択肢を持つこととなった。しかし、海外での使用経験の蓄積がなく、我々睡眠専門医を中心に臨床現場における使用経験の蓄積が必要であった。2015 年 12 月より投薬制限が解除されたことにより、徐々に様々な背景をもった患者での使用が増えており、使用経験が蓄積されつつある。

そこで本シンポジウムにおいて、スボレキサントを実臨床における治療に如何に組み込んでいくべきかを当院におけるスボレキサントの使用経験を元に講演させて頂く。

また私見とはなるが、スボレキサントの特性を知り、その特性を活かした処方をしていくことで、「出口を見据えた不眠症治療」の実践に繋がっていく点についても触れさせて頂くつもりである。